

2010年夏休み友情のレポーター フィリピン取材レポート

田崎 陸（群馬県／当時 13 歳）

- ・ フィリピンでの九日間 8/16（月）～8/24（火）
- 一日目 22：10 マニラ着 ホテルへ
- 二日目 KnK が運営する『若者の家』でビデオワークショップ
- 三日目 パヤタス（スラム）地区で取材
- 四日目 バゴンシーラン（スラム）地区で取材
- 五日目 ストリートチルドレンに取材
- 六日目 ビデオワークショップをした子とマニラ大聖堂へ
- 七日目 『若者の家』の子どもたちとプールへ
- 八日目 午前：フジテレビから取材を受ける
午後：ピア・エドゥケーターに取材
- 九日目 7：40 マニラ発 13：10 成田着

・ 一日目 フィリピンへ
18：40 に日本を出発。夜で外の景色は見えなかった。22：10 フィリピンに到着。外はとても蒸し暑い。ホテルに向かう途中の交差点で、車をたたく音がする。数人の子どもたちが何かを売っているのではないか。こんな夜遅い時間なのに、という思いもあったけれど、つい、目をそらしてしまう自分がいるのに気づく。

・ 二日目 『若者の家』の子どもたち
若者の家に着いた。家の中を案内してもらった後、家に住んでいる子どもたちのところに行く。まず、自己紹介。「リク・アン・パガラソ」(私の名前は陸です)「リク」より「リコ」の方が言いやすいようだ。そして、折り紙や風船で遊んだ。僕は不器用で、折り紙が苦手だが、みんなはすぐに覚えて、きれいに折っている。風船を出すと、楽しそうに遊び始めた。

午後は、ビデオワークショップ。ビデオカメラの使い方を若者の家の子どもたちに教える。思ったより、すぐに覚えてくれて、周りの人を撮っていた。撮影したのを再生すると、画面をのぞきこむように見ている。その後、チームを組み、夕食をつくっているところや縫製教室、コンピュータ教室の様子を取材する。みんな、とても興味を持ってくれた。

夕方、歓迎パーティー。ダンスや歌、ギターを披露してくれた。ダンスは、全員できるそうだ。僕たちは、日本の紹介をする。僕は、日本語とタガログ語のあいさつなどを書いた紙を見せた。大川さんは、ゆかたやじんべいを着せてあげる。

・ 三日目 ゴミ山とスラム地区

二日目のビデオワークショップで仲良くなったプロビル（16歳男子）とジャネット（13歳女子）と一緒にパヤタスというスラム地区にあるゴミ山に行く。彼らもこの地区の住人だ。最初にゴミ山を管理しているPOGという団体の人に話を聞く。ここは、一日に411台のトラックがゴミを捨てる。1～2年後には閉鎖予定。その後、ゴミ山の近くまで行き、車を降り、ゴミ山の手前まで歩く。なんともいえない強烈な臭いが漂ってくる。辺りにはプラスチック系のゴミが散乱している。足を踏む出す度に、無数のハエが飛び立つ。レポートを始めると、僕より少し体の大きい子どもが、ゴミをかついで通っていった。プロビルに、ゴミ山に入ったことがあるかと聞くと、週2、3回程度入っていると言った。なぜ入り続けるのかも尋ねると、学校に行くためだと答えた。プロビルからも、日本にこういうゴミ山はあるかときかれる。

次に、ジャネットとプロビルの家を訪問。ジャネットの家では、電気、水道、ガスは一切ない。部屋らしきものは一つだけで、そこに家族全員で寝ているという。一方、プロビルの家には、電灯があった。しかし、それは盗電といって、法律に反した方法で電気を引いている。トイレ、風呂も見せてもらったが、簡素な物で、トイレはもちろん水洗ではない。

そして、KnKの学校、ALSに行く。ここでは、プレゼントを渡したり、プロビルとジャネットにインタビューしたり、されたりした。

・ 四日目 バゴンシーラン

バゴンシーランというスラム地区に行く。二日目のビデオワークショップで仲良くなった、エディソン（17歳男子）とメデル（15歳女子）が案内してくれる。

まず、メデルの家。中は暗く、外よりさらに暑い。寝ている所のすぐ下は土地と石。彼女は、エレメンタリースクール（公立の学校）に行っているが、学校までの交通費が払えないことがしばしばあるそうだ。そんな時は、友だちが出してくれたという。しかし、友だちも出せない時は、いっしょに歩いて行ったそうだ。メデルが成績優秀者になった時の、証明書と写真を嬉しそうに見せてくれた。彼女のお母さんは、妊娠しているわけでもないのに、お腹がふくらんでいる。子宮がんと疑われているが、お金がなくて病院には行けない。さらに、聴覚障害の可能性もあるという。もし、お母さんが死んでしまったら、学校には行けなくなると、メデルは泣きながら話してくれた。午後は、KnKのALS（学校）で、僕たちの歓迎パーティー。学校に来ている子どもたちが、ダンスをしてくれたり、日本の歌を日本語で歌ってくれたりした。また、僕が持ってきたクレヨンや色鉛筆をプレゼントする。とても喜んでくれたのでうれしかった。

・ 五日目 ストリートチルドレン

ストリートチルドレンが多く暮らす、バリクタワック地区に行く。そこに、二日目のビデオワークショップで知り合ったアンジェリーナがいた。あの時は、少しひかえめだった彼女に、インタビューをする。以前は、小学校に入っていたが、一年生でやめる。家族を助けるために、お金を稼がなくてはならなくなったのだ。しかし、来年から、再び学校に入るそうだ。僕は、自分より下の子と勉強するのはいやではないのかときく。すると、自分と同じ子もたくさんいるから平気だと答えた。また、ゴミ拾い以外の方法で、収入を得たいと思わないのかときいた。もちろんそうしたいが、ほかの方法はないのだと悲しそうに言った。

午後は、彼女らのゴミ（ペットボトルなど）拾いに同行。ゴミ箱をあさることもあった。僕もペットボトルを二個見つける。ペットボトル1キロで15ペソ（約30円）になるそうだ。彼女たちは、別れた後も拾い続けた。

・ 六日目 世界遺産マニラ大聖堂

ビデオワークショップで一緒だった子たちと、世界遺産であるマニラ大聖堂に行く。マニラ大聖堂は、フィリピンで一番重要な教会だそうだ。僕たちは、近くの町並みを撮った。外国人もたくさんいる。馬車も通っている。教会の中に入ると、きれいな音色が聞こえてくる。アジアのパイプオルガンが奏でる音だ。白い衣装を着た聖歌隊も見える。この教会は、地震や火事、第二次世界大戦などで、五回位再建されている。ジャネットとアンジェリーナと一緒に、教会内でレポートをした。

・ 七日目 お別れ

若者の家の子どもたちと、屋外のプールへ遊びに行く。スライダーをしたり、騎馬戦のようなものをしたり、僕が持って行ったビーチボールを使って遊んだりした。また、飛び込みの技を競い合った。僕がゴーグルを出すと、みんな珍しがって、貸してくれと言うので、たくさんの子につけてあげる。

午後は、プールでお別れパーティー。みんながダンスをしてくれた。最後なので、僕も交ざって踊ってみるが、ついていけない。そして、ジャネットが美声を披露する。とてもいい歌だった。僕はメッセージを送る。必ずフィリピンに戻ってくる約束もした。そして、ダンスを踊れるようにすることも。

最後に迎えの車が来るまで、記念写真をたくさん撮る。その時に、僕が買ってもらったビーチサンダルを、若者の家のある男の子にあげた。彼は何もはいていなかったからだ。

若者の家に戻ってから、ビデオワークショップで一緒だった子たちに手紙を渡す。みんな泣いていた。僕も泣きそうだった。最後にみんなと握手をしたり、ハグをしたりして別れる。僕は、車の中から皆が見えなくなるまで、手を振った。

・ 八日目 ピア・エドゥケーター

ついに、現地での活動最終日。午前中は、フジテレビの取材。午後は、ストリートチルドレンが学んでいる識字教室に向かう。教室といっても、路地にブルーシートを敷いただけのもので、そこには30人程の子どもたちが座っていた。僕が様子を見てみると、カルロスという少年が声をかけてきて、授業で描いた絵を見せてくれる。それは、ちょうの絵だった。彼はこう語る。「僕はストリートチルドレンだから自由なんだ。ちょうも同じように自由だよ。それでちょうを描いたのさ。それに、ちょうは自分で未来を切り開いてる。僕もそうやって生きていきたいんだよ。」そして、彼は僕にその絵をくれた。僕は彼のたくましさ胸を打たれた。

その後、子どもたちの世話をしている、ピア・エドゥケーターにインタビューする。ピア・エドゥケーターは子どもの頃、KnKから援助を受けていた人たちなので、自分と同じ境遇の子どもたちのことをよく理解できるのだ。彼らが困っていることは、識字教室を行う場所が、授業に集中できる環境でないということだ。屋外なので、天候に左右されたり、何か騒ぎがあると、子どもたちはそちらに行ってしまうこともあるそうだ。だから、ストリートチルドレンのための屋内の施設が欲しいと話していた。また、子どもたちが遠い所からも教室に来てくれた時に、やりがいを感じると言った。

・ 九日目 さようなら、フィリピン

5:30 ホテルを出発。途中の交差点で、隣の車をぞうきんでふいている少年がいた。空港に着き、手続きを済ませ、飛行機に乗る。こうして、フィリピンを離れた。

・ まとめ

以前から僕は、貧しい国に興味があったが、想像する貧しい国の中に、フィリピンはなかった。しかし、実際に行ってみて、貧しい人もたくさんいることが分かった。その格差は、日本以上だった。中でも印象に残った出来事は、三日目から六日目まで昼食をファーストフード店でとった時のことだ。案内してくれた子たちも一緒に店へ行くと、彼らは必ず、家族や近所の子どもたちにおみやげを頼んでいた。生まれて、初めてファーストフードを食べた子もいたのだ。

僕は、彼らに出会ったことで、学校に行けるとということ、衣食住の心配をしなくていいということのありがたさを初めて実感した。学校に行きたいから、ゴミを拾い続ける。この事実、僕は納得できなかった。こんなことがあっていいのか、何とかしてあげたい、という思いがこみ上げてきた。

また、初日と最終日に車の中から見た子どもたちの働く姿に対しても、僕の心の中に変化があった。最初はかわいそうとしか思えず、目をそらしてしまっていたが、最終日はしっかりと見ることができた。それが何なのかはまだ分からないが、その思いを忘れず、これからその答えを見つけていきたい。

最後に、僕はフィリピンの子どもたちの笑顔の素晴らしさを、日本の子どもたちに伝えたいと思う。どんなに苦しいことがあっても笑顔でいる。これは、彼らに教えてもらったことだ。

2010年 夏休み友情のレポーター 田崎 陸

2010年夏休み友情のレポーター フィリピン取材レポート

大川 茉菜（東京都／当時 16 歳）

Smile ～フィリピンに住む友達が教えてくれた大切なもの～

はじめに

わたしは 2010 年 8 月 16 日から 24 日まで、KnK の友情のレポーターとしてフィリピンの子どもたち取材しました。ドキドキワクワクしながら向かったその国にはわたしの想像をはるかに越える社会問題が日常のありふれたものとして存在していました。そんな過酷な環境の中で生きる友達はわたしのとても大切なことを教えてくれました。

8 月 16 日（一日目） 22：10 マニラに到着

ホテルに向かう途中、わたしたちの乗った車は信号で止まりました。すると 2、3 人の小さな子どもが歩道から車道へ出てきました。その子どもたちは手に持った何かをみせながら車の窓をノックし、中にいるわたしたちにむかってしきりに声をかけてきます。その言葉はタガログ語だったり、英語だったり、日本語だったり…『社長さん、please』その子たちの声が今でも耳に残っています。この日、わたしはフィリピンの現実をまのあたりにしました。本や映像を通して見ていたものをこの目で見たのです。信号が青になり買ってもらえないとわかった子どもたちは、動き出した車の間に消えていきました。平然と戻っていく彼らの背中が『こんなこの国じゃあたり前だよ』と言っている気がして、わたしはただ涙をこらえました。

8 月 17 日（二日目） 若者の家へ

若者の家の一階では各地区から子どもを呼んで、コンピューターと縫製の職業訓練をやっています。写真はソーイングクラスの様子でわたしも帰国前にソーイングクラスで作ったスカートをプレゼントして頂きました。

若者の家の子どもたちとおりがみをしました。最初は緊張したけど、とても楽しかったです。

ビデオワークショップ

メンバー：ジャネット、プロビル、メデル、エディゾン、アンジェリーナ、ケビン、ミシェル、エドマーク、ジャイ、りくくん、まな

パヤタス、バゴンシーラン、SMB、若者の家の子たちとビデオワークショップ。

わたしたちが使い方を教えてあげました！！
自分たちで撮影したのを見て笑ったり、反省したり…
とても楽しかったです。

かんげい会

若者の家の子たちがわたしたちの歓迎会をしてくれました。日本紹介のときに着てもらったゆかたとじんべいもとても似合っていました！
絵の具セットとボールペンをプレゼンとして、みんなでパシャリ。

8月18日（三日目） パヤタスへ

ゴミ山のふもと、ここはゴミ山ではなく、民家の前です。
ビニール袋のまわりの黒いてんはすべてハエです。1歩足をふみ出す度に何百というハエがわたしの足もとから飛んでいきました。
パヤタスにはいると生ごみの異臭がしました。道にはゴミだけでなく犬やネコのフンがいたる所に落ちていて、ハエがたかっています。新しくゴミを運んで来たトラックによじのぼり、お金になるものやたべものを競って探す人もいて、とてもショックを受けました。 近くの家はゴミ山から集めてきたゴミに囲まれた状態で、まるでゴミ山にいるような気分でした。一緒にビデオを撮って遊んだジャネットとプロビルがこんな環境で生活しているのが信じられませんでした。現在、パヤタスのゴミ山を閉鎖しようという動きがあります。しかし、ゴミ山からの収入や食糧で生活している人々はどうなるのでしょうか。なにもできない自分がとてもくやしかったです。

KnKの識字教室（パヤタス）

ここでも絵の具セットとボールペンが KnK からプレゼントされ、みんなとっても嬉しそう。
みんなの笑顔を見ていると、ここがパヤタスで彼らがゴミ山からの収入で生活していることを忘れそうになります。

8月19日（四日目） バゴンシーランへ

バゴンシーランに着き、車をおりると、メデルはわたしの手をひいて家へ案内してくれました。そして自分の暮らしや家族のことを話してくれました。メデルのお母さんのお腹は妊婦さんのようにふくらんでいましたが、妊娠でなく病気だそうです。子宮がんではないかと言われているそうですが、お金がないため一度も診てもらったことはなく、メデルはいつお母さんが死んでしまうのか毎日不安で仕方がないそうです。学校で表彰されるほど勉強熱心で頭の良いメデルですが、長女だから学校をやめて働いてほしいと両親に頼まれているそうです。学校までのジープ二台がない時は友達がお金を払ってくれること、その子もお金がない時は2人で歩いて行くこと、どうし

でも勉強を続けて学校を卒業したいことなどメデルは泣きながら話してくれました。そしてさいごに、わたしたちに向かって「わたしの人生を共有してくれて、さいごまで話をきいてくれてありがとう」と言いました。 ショックを受ける内容ばかりでしたが、わたしたちに話してくれ、さらには感謝までしてもらえてわたしはうれしくて涙が出ました。

メデルの家…メデルはいつもこのガスランプ1つで夜、勉強しているそうです。メデルは大好きな友達のことや、成績が学校で3番になったときのことを嬉しそうに話してくれました。

新しい友だち

この日、わたしたちは新しく若者の家で暮らすことになる二人の男の子に会いました。とりあえず、試しに2週間ということでしたがわたしはきっとこの2人も若者の家を気に入ってくれると思っていた。今は緊張していてしゃべらないけど、なれたら普通に会話してくれると思い遊んでいました。しかし、翌日の朝2人は逃げ出してしまいました。初めは納得いきませんでした。路上で自由に暮らす彼らにとって、食事の時間や起きる時間が決まっている若者の家は窮屈でしかたないそうです。この時、ストリートチルドレンが減らないもう1つの理由を知りました。

ALS

バゴンシーランの非公式教育（ALS）では、わたしたちを歓迎してダンスをしてくれたり、うたを歌ってくれたり、こんなステキなプレゼントをもらいました。

若者の家

前にプレゼントした絵の具セットで絵をかいて、わたしにプレゼントしてくれました。

8月20日（五日目） SMB

サガンダーン、モニュメント、バリクタワック（通称 SMB）にはストリートチルドレンが多く生活しています。路上が彼らのキッチンです。家族みんなで路上生活をしているアンジェリーナは小学校に1年通っただけで学校に行けなくなってしまいました。彼女の収入はペットボトルを集めてジャンクショップに売ることです。1日の平均収入は約30ペソ（約60円）500mlのミネラルウォーターが1本15ペソなので日本の水を1本150円とすると1日300円で生活していることになります。また、ストリートチルドレンはシンナーなどに手を出してしまうことも多く、アンジェリーナの弟もシンナーをよく吸っているそうです。

わたしはこの写真のようによく彼らとくっついていたのですが、そのせいでTシャツが黒くよごれてしまいました。それに気がついた彼らはとても悲しそうな顔をしてごめんねとわたしに謝りました。わたしは笑って気にしないでと言いました。でも、そ

のうちの1人の子は悲しそうな顔をしたままわたしからはなれて行ってしまいました。どうしてあの時白いTシャツを着てしまったのだろう。今でもあの時の悲しそうな顔を思い出すと涙がでます。

若者の家

この日、わたしはミシェルにダンスを教えてもらいました！！とても楽しかったです。この国の笑顔の多さにおどろき、疑問に思ったわたしは、「なぜフィリピンの人はこんなに過酷な環境でも笑顔なの？」とミシェルにたずねました。すると…「フィリピンにはどんなにツライ時でも笑顔を忘れちゃいけないって約束があるの。だから、みんな笑っているの。」と教えてくれました。

8月21日（六日目） マニラ大聖堂へ

この日はビデオワークショップのメンバーでマニラ大聖堂に行きました。ジープニーの中では日本語勉強会が開かれ、ワイワイガヤガヤ。到着してからのレポートもとても楽しかったです。

この2枚の写真をとってくれたのはエドワード（9歳）。なかなか深い写真です。

8月22日（七日目） プールへ

この日はみんなでプールに行きました。朝からドキドキワクワク。みんなとはしゃぎまわってと～っても楽しかったです！！

この日はSMBに住む子以外の子たちとの最後の日でした。別れがさみしくて泣いているわたしに、みんなはDon't cry Mana. と声をかけてくれましたが、そんな彼らも涙をながしながら交わしたSmile。わたしは一生忘れません！

8月23日（八日目） SMBへ

この日はSMBで行われているストリートチルドレンのフォロー活動の取材に行きました。

ストリートチルドレンの1人であるカルロスは今日、自分が書いた絵について説明してくれました。彼の絵には一匹のちょうと花が描かれていました。このちょうは彼自身で路上で自由に暮らしているように、好きなところへ飛んで行くそうです。でも、彼はただ飛んでいるだけでなく、いろいろなものを見て、自分の夢を探そうと頑張っているそうです。わたしはこの日、ストリートの子たちへの考えが変わりました。いつかきっと、彼らにもステキな夢が見つかると思います。

ストリートチルドレンの友だちもたくさんできました。受け入れてもらえるかとても心配だったのでとてもうれしかったです。フィリピンでの最後の仕事として、ピア・エドゥケーターのジュンジュンさん、マイケルさん、ハロルドさんにインタビューし

ました。ピア・エデュケーターとは主に子どもたちをフォローする仕事で3人とも以前はストリートチルドレンだったそうです。ストリートの子たちに「路上生活が全てではないこと、生き抜くということだけでなく夢をもつこと」を知って欲しくてピア・エデュケーターの仕事をしているそうです。まだ子どもで金銭的支援のできないわたしたちに、彼らのためにできることはないか聞いてみると、こう答えてくれました。「彼らをさけないで欲しい。知って、理解して、友だちになって、そして心から愛してほしい」

わたしの大好きな友だちを愛してくれる人が増えますように。

私に教えてくれたたくさんの smile 本当にありがとう。

おわりに

わたしはフィリピンでいろいろなことを知りました。中には思わず目をつぶりたくなるようなこともたくさんありました。ただ、彼らがどんなに貧しく、過酷な環境で暮らしていても共通して持っていたもの、それが笑顔です。わたしは、そんな彼らの中で自然と笑っている自分を見つけました。返しきれないたくさんのことを彼らからももらいました。わたしが彼らのためにできる唯一のこと、それは自分が教えてもらったことを他の人へ伝えることだと思います。友情のレポーターとしてフィリピンに行けて本当に幸せでした。私の人生をかえるきっかけをくれたknkのみなさま、フィリピンでできたたくさんの友達、今までわたしを支えてくれたすべての人に感謝します。本当にありがとうございました。

2010年 夏休み友情のレポーター 大川 茉菜